

# 青嶺 Seirei

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

## 「文化の秋」真っ盛り

各学年共にそれぞれテ

ストが終わり、十月二八日の土曜日に開催される文化学習発表会に向けて本格的に始動しました。

本校は学年ごとにそれぞれ劇を行い、展示との二本立てというシンプルな構成ですが、毎年工夫を凝らしたステージが見られるということで大変楽しみにしています。

劇はそれぞれの役割を全員が果たして完成します。意見を出し合いながら、今の自分たちでできる最高の舞台を目指してほしいと願っています。心から応援しています！

## 「昨日の朝のいきごと」

昨日、学校の敷地内に設置している罠に猪がかかっています。今年初の捕獲ということ、職員はわざわざと対応に追われました。

生徒たちの反応はといえば割と冷静で、それもそのはず、日々遭遇していて、多くのエピソードを聞かせてくれました。小学生の時に、人影が見えたので元気に「こんにちは！」と挨拶したら、大きな猪で、びっくりして逃げました！という危機一髪の話もありました。

また「〇〇さんのお父さんは『りょうし』の資格を持っていて」という話から、「『りょうし』って海の人じゃない？」「いや二種類あって漢字が違うよ」と私。「漁師」「猟師」で偏からわかるよ」とすると「話しているときには分かりにくいですがよね、どうしたらわかりやすいかな？」と生徒たち。「海の『や』」「山の『つ』けたらどう？」など話は続きます。朝から少し頭を使っ考えた心地よい時間でした。これからも生徒たちの素直な好奇心や探求心を育てていきたいとしみじみ感じました。

## 子育て雑感

私の二人の子どもは、それぞれ自分の道を歩んでいます。その道筋を振り返ると色々なことが思い浮かびます。

同級生とトラブルを起こしたときは言いたいこともぐっと飲みこみ、相手の家に頭を下げに行きました。そして子どもと何がいかなかったのかを話しました。

宿題をいい加減にしたことで呼び出されたこともありましたが、話が伝わらない時には思わず声を荒げてしまうことも。「子育てって思った通りには全然いかないな…」とつくづく感じました。

わかるように伝える難しさ、押しつたり引いたりしつつ納得させる大変さ、少し成長してくると、理詰めでこちらの矛盾を突いてきて、それを納得させきれない歯がゆさなど、衝突が多かった時には平穏な時はやってくるのだからか？と不安にさえなりました。

学校からの電話なんてかかってこなければいいのにも正直思っていました。

しかしいつしか衝突が減り、呼び出される回数も少なくなり、少しづつ落ち着いたやり取りができるようになっていきました。

宿題を終わらせるために口うるさく言いながらなんとか最後までできたこと、自由研究や工作をケガしながら夜中まで一緒に取り組んだこと、大会を見に行き、スタンドから大きな声で応援したこと、受験に向けて家族全員で挑んだこと…子どもが取り組むことは、まるで自分自身が人生を生き直しているみたいに錯覚します。子どもが取り組んでいることには親として、出来る限り応援しました。

行き、スタンドから大きな声で応援したこと、受験に向けて家族全員で挑んだこと…子どもが取り組むことは、まるで自分自身が人生を生き直しているみたいに錯覚します。子どもが取り組んでいることには親として、出来る限り応援しました。

子育てがひと段落つくと、不思議に思い出されるのは一番手のかかった時期です。それは最も親の力が必要とされてきた、自分が一番頼られていた時期だからかもしれません。

そんな時期は長くはありませんので、今、子育ての渦中にある方々は、目が回りそうな忙しさの中にありつつも、いつか来る「終わり」を意識しながら、自分の半生を振り返りつつ子育てを楽しんでほしいなあと願ってやみません。

## バイクの装備

### 何持ってる？

オーストラリアは自国でバイクを製造していないので、全部輸入しなければいけません。関税も当時は一〇〇%で、日本で買う値段の倍の金額が必要でした。だから新車はもちろん、中古車も非常に高価でした。

一九八〇〜九〇年代に日本人やそれ以外の国の人でバイクで旅している人は割と多かったです。興味深いのはその装備にお国柄が表れていることでした。

もちろん個人差はありますが、日本製のバイク、キャンプ用具一式をきれいにパッキングしてカバーをつけているのは日本人、似ているが装備が少し異なり、全てが「ごつい」のがイスラエル人。彼らは兵役があり軍の装備をそのまま旅に活用していたため色合いが暗く、アーミーカラーでした。

BMWにジュラルミンのケース、スペアタイヤから予備の部品まで一式を積んで、フルフェイスのヘルメットで走るのドイツ人、自国のブランドに圧倒的な自信があり、何が起きても自前で解決できるような完全装備です。

逆に短パンで荷物もほとんど持たず、料理は焚火で（オーストラリアでは本当は禁止）、テントも持たず寝るのは外。工具は借りるというまるで隣町に行くかのような恰好で走っているのはフランス人。大きなキャリアにはめ込み式のバックを後ろと左右に三つ、シートには暑さ対策のシープスキンを張っているのは地元オージーです。旅の衣食住と移動手段としてのバイクについての考えや優先順位が表れていて、非常に興味深く面白かったです。

## 校長室より

なかなかケガが治らずある生徒と約束した「冬場一緒に坂ダッシュ」が果たせずに焦っています…